解説

海舟日記　第六冊

資料番号942017 02

法量　縦一八・〇cm×横一二・八cm　全四八丁（墨付四八丁）

本書は「海舟日記」の第六冊目にあたり、無銘の黒無罫紙を料紙とし、薄茶色の表紙を付けて袋綴じされている。表紙には「用箱日記」と書かれるのみで、他の記載はない。「海舟日記」全二五冊のうち、この一冊のみが他の冊と異なる体裁をもつ。

慶応三年（一八六七）正月二十八日から同四年四月二十六日までの記事を収める。表紙見返しには、海舟の自筆で備忘録的なメモが記され、さらにはじめの三ページには、一部は海舟の筆跡かどうか不明だが、ペンあるいは毛筆でいくつかの数式や外国語がメモ書きされている（口絵写真3・4参照）。

本文をみると、まずはじめの部分、慶応三年正月二十九日から二月二十五日にかけての約一ヶ月分が、前冊との月日の重複がみられる。記事内容の異同を比較すると、二月朔日・七日条の一部が合うほかは、とくに一致する部分は見受けられない。また、両者のうち一方の日記をもとにもう一方の日記を書いたと思わせる類似点も認められず、この二つの日記は別々に書かれたものと思われる。

慶応三年における本冊の記事の多くは、海軍所での業務に関するものである。元治元年十月軍艦奉行罷免ののち、慶応二年五月にふたたび軍艦奉行に任ぜられた海舟は、長州藩との停戦交渉を終えて江戸に帰り、以後しばらく政治の表舞台に立つことなく、軍艦奉行としての仕事に専念した。本冊はその業務日誌といえる内容で、表紙の題名「用箱日記」から推して、海舟が海軍所で自身の用箱（公用の書類箱）に保管して、その日の業務やできごとを記録したものと考えられる。

なお、この時期の海軍所幹部の日記としては、当時軍艦奉行並だった木村芥舟の日記「木村摂津守喜毅日記」（慶應義塾図書館蔵）が知られる。芥舟は、慶応三年三月まで将軍徳川慶喜のもとで京都にあり、四月初頭に帰府、その後海軍所で海舟とともに仕事にあたった。両者を比較すると、記事の内容や月日などに齟齬はみられない。この二つの日記は互いに補完しあう関係にあり、当時の海軍所の状況を知る上で良質な資料といえる。

慶応の軍制改革で、幕府は洋式陸海軍の本格整備に着手した。海軍については、慶応元年七月これまでの軍艦奉行の上に海軍奉行を置き、さらに同二年十二月には海軍総裁が置かれた。また、築地にあった海軍所の浜御殿内への移転が決まり、築地で

イギリス教師団による海軍伝習をおこなうこととなった。

慶応三年当時、江戸に在職し海舟の上司となっていたのは、海軍総裁（老中格）稲葉正巳（日記中では「縫殿殿」と記載）と、海軍奉行（若年寄兼帯）の大関増裕（日記中では「肥後殿」と記載）である。なかでも大関は旧くからの知己で、たがいに信頼を寄せ合う関係にあった。

慶応三年の日記には、海軍所の施設整備や幕府船を使っての物資輸送、軍艦開陽到着後の海軍士官の人事・俸給などにかかわる業務に関する記事がつづられる。海舟が大関に進言したのは、海軍所に仮病院を設置することだった（二月四日条）。前年末から水夫に熱病が流行していたことによる。この案は、オランダ人医師ボードウィンの協力を得て具体化していく。ただし、病院開設に至る前に幕府は瓦解した。ついで海舟は、日本の沿海図の翻刻を大関に願い出た（二月十一日条）。これは実現をみ、十一月十六日、海舟は沿海図を閣老・参政に披露した。なおこの地図は、「大日本沿海略図」（資料番号9220134）という名称で、当館所蔵の第二長崎丸引き揚げ資料の中に含まれている。その図には「海軍所」印が捺され、海舟の識が載っている。版元は、海舟の親友で日記に幾度となく登場する江戸の書肆福田鳴鶯とみられる。

さて、イギリス教師団の受け入れ準備を進める中で、一つの問題が起きた。それは軍艦開陽にかかわるできごとである。開陽は幕府がオランダに発注した洋式軍艦で、慶応三年三月に同艦艦長となる榎本武揚以下オランダ留学生を乗せて横浜に到着した。引き渡しに際して、オランダ側は操艦指導のためにオランダ人士官の雇入を申し入れ、幕府も一・二年の雇用を認めた。海舟も、オランダ人への給料調査を受け持ち、フランス人教師の給料や長崎海軍伝習所時代の前例を日記に書きとめている（四月廿二日条）。しかし、引き渡し直前にイギリス側から強い抗議があり、結局幕府はオランダ人雇用を断念し、断り役を海舟に委ねた。時機により海舟がオランダへ出向くことを含んだ指令で、六月十一日海舟はオランダ公使館を訪ねた。交渉は「大ニ都合よく」まとまった。こうして、九月にイギリス教師団が横浜に来着、年末の十二月に伝習が開始された。その間海舟は、犬吠埼に設置する灯台をめぐってのイギリス公使パークスとのトラブル対応のため富士山艦で出張するという一幕もあった（十月八日条ほか）。

また、この時期の日記中には、何礼之助・薗鑑三郎・松濤権之丞・乙骨亘ら、語学力にすぐれた洋学派知識人の名がところどころに登場する。彼らは開成所や外国方などから海軍伝習での通弁や翻訳のために配属された面々である。慶応期の軍制改革で、多くの洋学派の人材が軍事部門へ投入された。翌年戊辰

の戦乱の中で、彼らはさまざまな運命をたどっていくこととなる。

もう一つ、本冊で主要な記事は、海舟の長男小鹿のアメリカ留学の件である。幕府留学生候補から外された小鹿を、海舟は私費留学させるべく、多忙な業務の合間をぬって手続きに奔走した。小鹿の留学にあたり、海舟は横浜のアメリカ人貿易商T・ウォルシュに渡航の世話を頼んだ（九月廿九日条）。ウォルシュが弟J・G・ウォルシュらと経営するウォルシュ＝ホール商会は、「亜米一商会」の名で知られる横浜で最も有力な外国商社の一つである。彼らは生糸と茶の輸出をおもに手がけており、この商業をつうじて海舟とウォルシュとの関係はその後深まっていく。

日記に大政奉還の報が記されるのは、慶応三年十月廿二日条である。これまで海軍所業務の記事が大半だったのが、このころから政治に関する記述が交じってくる。坂本龍馬暗殺の記事が書かれるのは、十二月六日のことである。同月十七日条には、久しぶりに閣老へあてた建言書を認めたことが記される。二十三日には江戸城二の丸の火災があり、「押而登城」して稲葉正巳に対し政局について建言した。

慶応四年の年が明け、正月五日の伝習初めから通常の業務が始まったところへ、鳥羽伏見の戦いの報が入り、将軍慶喜を乗せた開陽が江戸へ帰ってくるあたりから、日記の記述は大きく変わる。慶喜追討の新政府軍との交渉役に大久保一翁とともにあたった海舟の行動が、断片的ではあるが江戸城が引き渡された四月の末近くまで記されていく。とくに三月十三・十四日条には西郷隆盛との会談が記され、「小拙此両日は全力を以て談判す」の一文が印象的である。なお、正月元日条と十二日条の上欄に鉛筆による書き込みが認められるが（口絵写真8・9）、後世のものかと思われる。

ここで触れておかなければならないのが、この時期の海舟のもう一つの日記「慶応四戊辰日記」（講談社蔵）との関係である。これまでに刊行されている全集のうち、改造社版『海舟全集』が「海舟日記」として収載しているものは、「慶応四戊辰日記」を底本にした「海舟日記抄」で、その後刊行された勁草書房版『勝海舟全集』は、現在当館所蔵の「海舟日記」を翻刻し、本冊の部分も書き下しの形で活字化している。しかし、勁草書房版は「慶応四戊辰日記」の記事と本冊の記事を混合させながら載せているため、体裁上に混乱が生じ、かえって読解を妨げてしまったという難点があった。今回の史料叢書の刊行により両日記間の整理ができ、勁草書房版の問題点は克服されたと思う。

本冊と「慶応四戊辰日記」との記事を比較すると、「慶応四

戊辰日記」の冒頭の記事にあたる慶応三年十月廿二日条・十二月十五日条・同月廿三日条が、両者ともに似通った文面になっている。「慶応四戊辰日記」の序文が慶応四年正月二十九日付で、この書の執筆開始時期が慶応四年正月をさかのぼらないと判断されることから、少なくとも慶応三年の両者重複する時期の記事については、おそらく本冊の記事を下敷きにして「慶応四戊辰日記」が書かれたと考えられる。

本冊と「慶応四戊辰日記」との関係については以前から議論があり、後者の執筆時期など検討すべき問題点がいくつかあるが、両者の比較において本冊の特徴といえるのは、「慶応四戊辰日記」が海舟がこの時期に書いた建言を記録し、戊辰前半期における自身の業績をまとめることに主眼を置いた手記的・別記的内容であるのに対し、本冊は海舟の行動メモ的な性格をもつ日記というところにある。記事が短く断片的であるが、「慶応四戊辰日記」に載らない海舟の行動記録がここには記されている。とくに陸軍総裁（のち軍事取扱）就任後の脱走歩兵への対応や、新選組局長近藤勇の逮捕をめぐる記事、また一触即発の房総地域の鎮撫に奔走する阿部邦之助および信太歌之助・松濤権之丞・江川隼太ら軍事掛手附の動向が確認される記事は、本冊ならではの特徴である。

慶応四年四月二十六日の日付をもって本冊は終わり、その後第七冊へと続くが、第七冊は再び罫紙を使用し、記述内容も比較的詳しく臨場感のある海舟の日記らしい通常のトーンに戻る。このことと、第五冊の終尾部分の日付の重なりとを考えあわせると、業務日記的な本冊と別記的な「慶応四戊辰日記」のほかに、現在まで確認されないが第三の日記の存在の可能性も想像しうる。

（落合則子）

〈付属文書について〉

a　覚　一枚（口絵写真5参照）

縦一六・二cm×横一四・九cm

日記の慶応三年二月十五日～廿三日条が書かれている見開きページの下に、両ページをまたがるようにして貼付される。二月廿三日付で年を欠くが、内容から、慶応三年とみられる。海舟の自筆。長男小鹿のアメリカ留学で、便船を待つ間、横浜の語学所で英語を学ばせたいという願書の下書と思われる。日記の慶応三年二月廿二日条に「小鹿横浜語学江入塾相願」とある。小鹿の随行者には、門下の高木三郎・富田鉄之助を頼み、一行は七月二十五日、コロラド号に乗って神奈川を出航した。

b　書付　一枚（口絵写真7参照）

縦一五・五cm×横七・〇cm

日記の慶応三年三月十五日～十八日条が書かれているページの上に貼付される。慶応三年三月二十五日に江戸を出航した幕府洋式船長鯨に乗船した人員をメモしたものと思われる。最後の一行は海舟の自筆だが、前三行は異筆か。日記の二月廿九日条に「奇捷・長鯨之内、喝蘭之コンシュル江御借」とあり、この時長鯨船を選んだものと思われる。「蘭公使一人」はオランダ総領事ポルスブルック、「上等士官三人」は同国海軍士官ヂナウクス・コーニング・ハルデスの三名。また、三月廿五日条の記事から、「壱岐殿」は老中小笠原長行、「外国奉行一人」は平山敬忠、「御目付三人」は岩田通徳・織田信重・古賀謹一郎、「御勘定奉行二人」は小栗忠順（海軍奉行並兼帯）・浅野氏祐（陸軍奉行兼帯）に比定できる。長鯨船は大坂へ行き、四月十二日に神奈川へ帰港した。

c　船室割平面図　一枚（口絵写真7参照）

縦一四・二cm×横一七・八cm

bと同じページの側面に貼付されている。海舟の自筆ではないと思われる。洋式貨客船とおもわれる船の船尾内部を水平に切った形で、船室の部屋割りが簡略に記される。各室とも出入り口にドアを示す記号が記され、室内の「腰掛二ツ」は上下二段ベッド、真艫の「こしかけ」はソファをさすと思われる。「茶番」は客室係のことか。前項bと関連するもので、長鯨船に乗って上坂するポルスブルックおよび小笠原長行ほか一行の部屋割りを検討するために作成された図であると考えられる。長鯨は幕府がイギリスから購入した洋式船で、その構造を示す図面類は伝わっていない。本図が長鯨のものであるならば、その内部を知ることができる貴重な資料である。

d　荷物書付　一枚（口絵写真10参照）

縦一六・一cm×横一一・八cm

海舟の自筆によるメモ。「二月廿七日」の日付は、慶応三年と思われる。「右翔鶴丸江可積込御用物」とあり、本文書が幕府洋式船翔鶴に積載する予定の荷物リストであることがわかる。奥坊主の林悦より出されているところから、在京する将軍徳川慶喜からの求めで江戸城から移送する「御用物」と考えられる。日記慶応三年二月廿六日・廿七日・晦日条に、翔鶴が四月初に大坂へ出航することが記されており、荷物はこの時大坂へ運ばれたと思われる。

e　榎本武揚ほか身分覚書　一枚（口絵写真13参照）

縦一六・五cm×横一二・〇cm

海舟自筆のメモ。慶応三年四月十六日ごろ、勝は、オランダより帰国した伝習生榎本釜次郎・沢太郎左衛門・田口直次郎等を軍艦役などに抜擢するよう幕府に願い出ている。この三名の禄高・身分案をメモ書きしたものと考えられる。榎本は禄高を「其身一代五拾俵・百五拾俵高」とし軍艦役とすること、沢は「是に少々下ル（禄高）」、田口は「身分今迄之通（下総関宿藩）藩士」にて召出すことが勘案されたようである。結局、榎本は軍艦役、沢は軍艦役勤方、田口は軍艦役勤方見習に召出されている。

f　禄高・役金など書付　一枚（口絵写真11参照）

縦一五・八cm×横一三・七cm

海舟自筆によるメモ。ある役職について、本高、扶持米、役金などを含めていくら給付されるかを両換算で試算したメモ書き。海舟は、慶応三年四月十六日ごろ、オランダ伝習より帰国した榎本釜次郎（当時、兄勇之助の厄介）ほか二名を新規に召出し、軍艦役（役料四〇〇俵）などに抜擢するよう幕府に願い出ている。この願い出に際し作成されたものと考えられる（e解説参照）。

g　覚　一枚（口絵写真14参照）

縦一二・五cm×横一二・〇cm

海軍伝習にかかわる軍艦組の辞令についての覚書。海舟の自筆。甲賀源吾と塚本桓輔を伝習掛重立取扱に、塚本録助・森本弘策・古川節蔵を伝習掛とすることが記されている。「肥後殿」は海軍奉行大関増裕のこと。（慶応三年）十月五日の仰出とあるが、日記中には本文書に直接対応する記事は認められない。「海軍歴史」十九によると、この月海軍伝習にたずさわる人員が決められ、その中に甲賀・塚本桓輔の名がみえる。十一月には甲賀・塚本は生徒取締を命じられ、二十四日から伝習が開始された。

h　山県精三郎明細短冊　一枚（口絵写真12参照）

縦二七・四cm×横九・七cm

長崎奉行支配定役山県精三郎の明細短冊の写である。明細短冊とは、短冊状の紙片に、本人の名前、年齢、禄高、職歴、祖父・父の名前、略歴などを記した幕臣の履歴書である。慶応三年（「当卯年」）三月幕府は、御目見以上以下にかかわらず各役所の下僚に対して、明細短冊の提出を命じた。この際、山県が作成したものと考えられる。

i　方眼紙下敷　一枚（口絵写真15参照）
縦一七・四cm×横一一・一cm
冊子よりやや小さな大きさに切った紙に、墨で縦横のマス線が引かれている。日記を書く時の下敷きに使用されたものと思われる。

（落合則子・田原昇）

海舟日記　第七冊　資料番号942017 03

法量　縦一八・二cm×横一二・五cm　全九六丁（墨付九六丁）

本冊は、無銘青罫紙を料紙とし、茶色の表紙を付けて袋綴じされている。表紙に海舟の筆で「従戊辰四月廿八日巳四月廿日迄」とあるが、実際は慶応四年（戊辰）四月二十八日から翌明治二年（己巳）三月二十日までの分をおさめる。日付の上では日記第六冊からの続きだが、おもに業務上の備忘を書き留めた前冊から引き続いて本冊を書いたのか、本冊へと続く別の慶応三年分の日記があったのかどうか判断に苦しむところである。

本冊からは、徳川家処分の展開と旧幕臣の駿河移住、上野戦争や会津戦争など激化する戊辰戦争、明治改元や天皇東幸を経て、翌明治二年正月の薩長土肥四藩主による版籍奉還上表文の提出といった、まさに旧体制から新体制へと移行する過渡期の様相をはっきりとうかがうことができる。こうした時期にあって、海舟は旧幕脱走兵の鎮撫活動に関わり、徳川家に有利な処分を求めて新政府要人と交渉するなど、徳川家を代表して縦横に活動を繰り広げていった。海舟にとって最も苦悩に満ちた一年だったろうが、この時の活動が明治における海舟の立場を形成していくと言っても過言ではあるまい。本冊はこうした海舟の苦心、思うに任せない政局への慨嘆等々を如実に示すとともに、明治維新期における旧幕府側の数少ない記録のひとつとして極めて貴重である。

本冊の、閏四月二十三日、五月十四日・十五日・二十四日、六月二十八日、七月朔日・八日、九月朔日、明治二年正月二十二日の各条には、朱色の紙片が貼付されている。上野戦争、旧幕脱走兵の様子、駿河移住等をめぐる海舟の動向などが記された箇条で、これらは、明治十年代に修史館で編纂された「海舟日記抄」と対応する。該当部分には◇を付して明示した。

四月二十八日、山岡鉄舟（精鋭隊頭）の来訪によって、本冊は開始される。海舟と鉄舟とは、江戸開城をめぐって尽力したことで有名だが、両者は幕末以来の同志とはいえなかった。そもそも山岡は文久の浪士組結成に関わった尊攘主義者であり、開国派の海舟とは一線を画していたのである。それが徳川家の

危機に直面するや、両者は急速に接近し、徳川家救済のために同志としての活動を展開していく。おもに、対政府関係は海舟が行い、謹慎中の前将軍慶喜の警護は、高橋泥舟（遊撃隊惣括）と共に山岡が担当した。水戸の情報・慶喜の内意などは、慶喜に従う浅野氏祐（若年寄）もさることながら、山岡を通じて海舟に伝えられた（六月十、十六、二十七、二十八日条、七月十二、二十五日条など。以下6・10のように記す。宮地正人「明治九年静岡県成立の特徴」『静岡県史研究』一三号参照）。山岡との交流は、同人の人脈である石坂周造（閏4・3）、関口隆吉（12・21、28）、梅田国之輔（7・22、8・24、9・1、26）、池田徳太郎（12・17）らとの接触を招いた。これも戊辰期海舟の特色として記憶しておきたい。片桐省介の情報が入るのも（8・1、10・29）、片桐が関口と同志だったことによるであろう（『関口隆吉伝』）。

江戸開城が実現したとはいえ、大総督府をはじめとした新政府軍の立場は決して安定したものではなく、政府軍に不満を持つ旧幕歩兵の暴動・脱走によって、江戸および関東周辺は治安不安に陥っていた。こうしたなか、海舟は大総督府から江戸市中鎮撫・取締を委任され（閏4・2）、大久保一翁（若年寄）とともにその任に当たるのである。政府軍は江戸の治安を徳川方に委ねなければならなかったほど、窮地に立たされていた。大総督府の不安定さを察した海舟は、旧幕臣の不満をなだめ江戸の治安を回復させるには、水戸の慶喜を江戸に戻すことが必要だと迫り、政府軍に揺さぶりをかけた（閏4・4、原口清『明治前期地方政治史研究』上参照）。徳川方と交渉していた東海道先鋒総督府参謀の海江田信義（薩摩藩士）は、徳川家に対して穏健派であり、海舟には好都合だった。

新政府軍への歎願だけではなく、海舟は徳川方の恭順を示すため、旧幕臣の鎮撫・取締に積極的だった。これに際して大きな役割を果たしたのが、軍事掛付属の面々だった。彼らは軍事取扱の海舟の配下にあった陸軍関係者と思われ、なかには信太歌之助や松濤権之丞のように総房三州鎮静方（信太）、武総鎮撫方（松濤）となり、各地で鎮撫活動を展開していく。他のおもな面々は、六月二十五日条に記され（付属文書cdも参照）、彼らの活動の一端も、本冊より垣間見ることができる（例えば片山直太郎と乙骨太郎乙の八王子出張〈閏4・15〉、中根造酒次郎と児玉益之進への小田原出張要請〈同前〉など）。彼らは、鎮撫活動だけでなく、海舟と第三者とを取り持ち（7・23、9・14）、また、海舟の情報収集にも一定の役割を担っていた（9・20）。

両者の密接な繋がりについて、本冊より一例をあげると、海舟は松濤が脱走兵に殺されると、その妻子に金子を渡したり

（閏4・23）、政府軍に逮捕された信太（7・13）を海江田を介して救済し（高橋実『幕末維新期の政治社会構造』参照）、赦免後に金銭援助をする（12・16）など、相互の関係は深い。土屋金六郎や乙骨太郎乙は仲間の処遇について、海舟に何事か歎願しているし（8・1、9・22）、海舟も駿河移住後の彼らの役職・身分が決まると日記につけている（7・5、明治2・1・19、同・2・8）。戊辰期海舟の人脈のなかでも、注目すべき面々で、海舟の活動を検討するうえでも重要となるだろう。軍事掛附の何人かは、駿河移住後沼津兵学校で活躍したことが知られる（沼津市明治史料館『沼津兵学校』）。

さて、江戸の政府軍が、治安の悪化や海舟の政治力に押され、徳川寛典処分に傾くなかで、京都の新政府は政府主導による処分の決定をはかり、閏四月十日に三条実美を関東監察使に任じ、処分のいっさいを三条に委任することとした。翌十一日、三条は京都を出立し、同月二十四日に江戸に到着した。この情報は、その日のうちに山岡から海舟に伝えられた。二十九日には、徳川家の相続者を田安亀之助とする旨が出され、徳川家の存続が確認される。だが、この時は領地・石高は明らかにされず、海軍関係者の激高を招く（5・1）。

三条の下向は、それまで徳川家と交渉していた穏健派の東海道総督府の地位が低下したことも意味していた。海江田と親和的な海舟にとっては、不利な状況の出現である。江戸市中取締も海舟から政府軍の手に引き渡された（5・2）。

こうしたなか、かねてから不穏な動きを見せていた上野彰義隊に対し、政府軍は大村益次郎の指揮で、五月十五日にいっせいに攻撃を仕掛ける（上野戦争）。海舟の鎮撫活動と、慶喜の江戸帰還は水泡に帰し、「我か尽力今日ニ及ひしもの瓦解に到らしむ、可憎之極也」（5・15）と切歯するのである。そのうえ彰義隊を陰で支援していたと新政府軍から疑われ、赤坂の自宅を襲われる憂き目にあった（前同）。この措置は海江田の知らないところでなされ、政府軍は海舟の政治力で左右できる状況ではもはやなくなっていた。海江田は参謀を退き（5・23）、海江田と海舟とのパイプ役を務めていた薩摩藩士益満休之助も、上野戦争の傷がもとで二十二日に死んだ。新政府軍との接点が崩れ、思い通りにならないことに嫌気が差したのか、海舟は「不快」と称して引きこもりにかかるのである（5・24）。もっとも、徳川家処分において、海舟が出て事を有利に運ぶ余地はすでになくなっていた。すなわち、上野戦争の勝利によって、政府は関東における基盤を確立し、五月二十四日には、徳川亀之助を駿河府中七〇万石の藩主とし、領地は駿河一円、その他は遠江・陸奥両国で下賜する旨を明らかにするのである。

引きこもりが続く海舟へは、徳川方から出勤依頼が相継いだ

（5・24、6・28、7・1）。この頃は、天皇の東幸問題と絡んで、旧幕臣の駿河移住が政府の重要課題にのぼっており（以下、東幸については原口前掲書参照）、この面からも海舟の尽力が求められていた。折しも、東幸を具体化するため、政府参与の大久保利通が六月二十一日に江戸に到着し、海舟と接触して、処分に不満を持つ旧幕臣の鎮静と駿河移住を督促している。大久保は国内統一事業を進めるためにも、天皇東幸は不可欠だと考えていた。いっぽう海舟は、大久保の要請と引き替えに、慶喜の赦免や一円領地支配を要求するなど、徳川家に有利な条件を引き出そうと駆け引きを再開する。それは東幸に消極的な肥後藩を交え、三つ巴で行われた。肥後藩は旧幕臣の生活不安を取り除けば、過激行動はおさまり、東幸をせずに政府の東国支配は確立する、という論法である。海舟の慶喜赦免運動を支援し、旧幕臣の鎮撫を海舟に依頼した（『肥後藩国事史料』巻九）。

八月十九日には、榎本武揚が軍艦開陽以下八隻を率いて品川を脱走し（8・20）、海舟は不利な立場に立つものの、逆にこれを利用し「愚存」が採用されれば引き戻しも可能、と肥後藩の一層の支援を求めた（8・21）。この「愚存」とは、八月二十六日に大久保に話した①慶喜の赦免、②駿河近傍での領地下賜、③御三卿清水家一一万石の下賜、であろう。清水家の件は、細川護美（肥後藩主の弟）が提起したのを海舟が取り入れたようである（『肥後藩国事史料』巻九）。②は大久保の尽力により伊豆一円下賜と内決したが（9・1）、結局、遠江一国・三河国内で下賜する旨が出され（9・5）、③清水領も徳川家に附属した（8・28）。だが、①慶喜の赦免は見送られ、その後も歎願はなされるものの（9・13、10・5、11・13）、本冊の期間で実現を見ることはない。いっぽう大久保も無条件で②③を決定したわけではなく、引き替えに旧幕臣の鎮静と早急な駿河移住を義務づけた。むろん、東幸の早期実現をはかるためである。海舟は移住を妨害する藩重役がいるなかで（9・8、9）、督促を繰り返さねばならなかった（9・3、7、8）。

住み慣れた江戸を離れ、見知らぬ土地で再出発をすることに不安を持つ旧幕臣が大勢いたであろうことは想像に難くない。海舟は旧幕臣の生活不安を少しでも解消しようと、早くからこの地の国産茶に着目し、これを各地に売って富国をなそうと考えていた（6・21）。曾祖父米山検校が商売で大儲けし、自らも多彩な商人人脈－渋田利右衛門（箱館商人）・竹川竹斎（伊勢商人）・竹口信義（江戸商人・竹斎実弟）・加納次郎作（神戸商人）・浜口梧陵（紀州商人）ら－を持っていた海舟ならではの発想といえようか。

藩の富国だけではなく、困窮した旧幕臣がいれば出金を惜し

まなかった。「我か為ニ生活を勤めす、空手して憐を乞ふ者」へは、「如何そ普くめくむを得む哉」を信条とするのである（8・晦日）。義理人情にあつい父小吉の影響を受け継いだ海舟の面目躍如である。明治以降もこうした姿勢は変わることはない。

そして、有能な旧幕臣へは、政府出仕の道を切り開いた。大久保利通ら実力者に手づるがあった海舟ならではの人材登用である。出自の隔てなく人材を育成・登用せよとは、幕末以来の海舟の持論であった。本冊には、加藤弘之・津田真道（11・3、2・1・19、22）らの政府出仕に関する記事がある。ただ、蘭医杉田玄端（玄白の養子）は、海舟の斡旋にも関わらず、政府出仕を「恐怖」して断った（9・1、7、21、『勝海舟全集別巻　来簡と資料』）。

話を駿河移住に戻そう。海舟一家、および海舟の手荷物の移住・移送はどのようにして行われたのか。母信子はじめ一家は、九月三日に通行印章を受け取ると、海舟を江戸に残し、その日の内に陸路自宅を出立した。同月九日に駿河に到着し、仮寓として河原町新通川越町（静岡市）の藤田屋藤右衛門方に落ち着いた（9・14）。のちに海舟は赤坂の自宅を売り払い、紀州藩士武内孫介らの世話で同藩邸内の借家に住まった（11・19、2・1・20）。武内は大政奉還後に譜代連合を画策した佐幕派である（『学海日録』二）。海舟との関係もおもしろい。

海舟の手荷物は何回かに分けて搬送された。最初の便は八月十日条に見える。まずは洋書五箱を船頭平蔵に託して、吉川東一郎（静岡県庵原郡山原村名主）宛てに輸送した。十五日には松次郎なる者の世話で、「米飛脚船ニーヨルク」に荷物を積み込んだ。松次郎の父は甚太郎とあるが（8・15）、この甚太郎は、小鹿村（静岡市）名主の出島竹斎と思われる。ちなみに竹斎には、米国貿易商フリーマンの協力でアメリカに渡り、明治元年（一八六八）まで八年間サンフランシスコ等に滞在した松造という息子がいた。松造は日本最古の「着色写真」の被写体として著名である（小沢健志編『幕末　写真の時代』）。七月二日条上欄には松造に関する記述もある。結局この荷物は、「ニーヨルク」の事故により別船に積み込まれ（8・20）、駿河へ運ばれた。九月五日条上欄には、吉川東一郎の土蔵・鍵類の引き渡しについて記されるが、これは付属文書gの解説を参照されたい。六日には蒸気船に積む荷物を浦賀に送るものの行き違いがあった。輸送の混乱さが察せられる。二十六日には、市川屋船便で長持・箪笥などを輸送した（運賃は三両三分二朱八〇銭）。十月十一日、海舟は無禄移住者の処置等のため海路登駿し、翌日駿河に到着した。月末には小鹿村に出向き、さらに吉川から荷物一四個を受け取っている。

ところで天皇東幸は、肥後藩など諸藩の消極姿勢にも関わらず、大久保利通ら維新官僚によって着実に進められた。徳川家への領地引き渡し、旧幕臣の駿河移住等に一応の目途が付いた後の九月二十日、天皇は東京に向け京都を出立する。駿府藩では、天皇の通行に支障をきたさないよう、富士川の船橋の修復に取りかかった（9・19、20）。これに尽力したのが、海舟とともに咸臨丸で渡米し、のちに藩大参事となり水利路程掛として活躍する佐々倉桐太郎であった（9・20）。二十七日には、船橋も堅牢になり、早晩完成するだろうという見込みが大久保一翁から伝わった。

天皇はいったん帰京するものの、翌明治二年三月七日に再び京都を発し、同月二十八日に東京に到着した（1・17）。江戸城はすでに東京城と改称され皇居となっていた。その皇居に徳川将軍の霊廟があるのは体裁が悪い。そこで海舟は紅葉山の霊廟の撤収にも関わっていくのである（12・22）。明治二年正月二十四日には、藩中老から紅葉山の件で見込書を受け取った。寛永寺や増上寺の廟所の処置にも関係したようである（10・9、12・16など）。紅葉山霊廟は二年十一月末までに撤去され、位牌等は徳川家が借用していた紀州邸にいったん引き取られたうえ、翌年六月には静岡に移された（辻達也「明治維新後の徳川宗家」『専修人文論集』六〇）。徳川の世であったならば、海舟が関知しえなかった神聖な将軍霊廟である。こうしたことからも、幕府崩壊の現実を痛感させられるのである。

徳川家処分や旧幕臣の駿河移住をめぐって、政府要人と交渉し多忙な日々を送りながらも、海舟はアメリカ留学中の愛息小鹿へ出状・送金を怠ってはいない。これらは越前の医師にして竹口信義の友人である本多貞次郎を介して横浜から運ばれた（6・21、8・11、9・25、2・3・9）。小鹿からの書状や届け物も貞次郎やウォルシュ＝ホール商会番頭の松屋伊助を通じて海舟の手元に届いた（6・19、8・23）。海舟の商人人脈の一端がうかがえる。もと開成所教授並で、慶応三年には海軍伝習に関わった何礼之助も、手紙のやり取りに関わっていたのは興味深い（6・5、12、7・2）。送金については、五〇〇両もの大金を、再渡米する高木三郎（庄内藩士・海舟弟子）に託している（12・1、7、11）。

明治二年の注目記事は、版籍奉還の上表をめぐっての動向である。正月二十八日、海舟は大坂にいた弟子佐藤与之助から、薩長土肥四藩主が二十日に「領国を献納」したという知らせを受けた。二月十二日には、与之助から四家の建言書写を受け取り、十三日に河野左門（駿府藩中老）宛てにそれを送った。駿府藩では、二十八日に浅野氏祐（同中老）が京都に出立し、早々に「献国之御書付」を政府に差し出す（3・2）。海舟はそ

れを知ると憤懣をあらわにした。「唯世間ニ雷同して、一二を争ふは我か不服処」（同前）と、重大事件を自分に相談しない中老衆をなじるのである（『勝海舟全集2　書簡と建言』）。正月晦日に、米沢藩士宮島誠一郎が来訪した際には、版籍奉還の必要性を論じつつも（友田昌宏「宮島誠一郎と戊辰戦争」『幕末維新期の情報活動と政治構想』）、自藩については旧幕臣の「活計相立、百年之後は人物も出来之基を開置度、当節之流行を逐不申趣意」（『勝海舟全集2』）とするのである。版籍奉還は形式だけで領地は安堵されるとみた諸藩の動向を、「当節之流行」とみ、土佐藩ら公議政体路線と提携して版籍奉還をなそうと考えていたのである（松浦玲「勝海舟の生涯とその後　遙かな海へ」『論座』四四参照）。思えば海舟は、幕末以来、幕府内で自説が通ったためしがほとんどなく、何度も煮え湯を飲まされてきた。同様に、駿府藩でも採用されることはなかったのである。四月二十一日（第八冊に記事あり）、海舟は駿府藩に御暇願を提出し、藩政とは一線を画することになるのである。

以上、明治維新の重要な局面で海舟がどのように関わったのか、その人脈等に着目しながら概観したが、他にも紹介しきれなかった多彩な論点を見いだすことができるだろう。本日記の活用を期待したい。

（藤田英昭）

〈付属文書について〉

a書付　一枚（口絵写真19・20参照）

縦一六・〇cm×横一二・六cm

「五月七日」の端裏書があり、慶応四年五月初旬のものと思われる。海舟の自筆。冒頭の「中愛宕下」以下の文面は意味がよくとれないが、次行以下は、幕府船黒龍の修復費用の半分を出すこと、彰義隊中の諸藩士について紀州藩が世話をし分離させる旨を総督府に申し出ることの二件の事項が書かれている。日記の慶応四年閏四月廿三日・廿四日条に、海舟が仙台藩士大童信太夫に幕府船大江丸を二万五千両、黒龍丸を三万両で譲渡する交渉をする記事がみられる。大江丸は、六月平潟口での新政府軍との戦闘で仙台藩の船として活動したが、黒龍丸の消息は不明で、当時莫大な修復費が見込まれるほど損傷がひどかったことが本文書よりうかがえることから、結局成約に至らなかったとも考えられる。また、もう一件の事項については、日記五月十一日条に「尾・紀二家江無禄之者壱万五千計養育方頼として可遣間、総督江御届可被下旨、田公江申立」とあり、本文書に何らかの関連があると思われる。また前日の十日には、彰義隊頭取の本多敏三郎が紀州藩と関係のある大崎弥一郎らとともに海舟を訪ねている。上野戦争直前に、彰義隊を説得、解体させ平和的解決を模索する協議が、彰義隊幹部の一部と海舟・

紀州藩との間で交わされていたことをうかがわせる資料である。しかし、説得工作は失敗に終わり、五月十五日に上野戦争が勃発した。

b　杉田恕介の御暇願に関する書付　一枚（口絵写真21参照）
縦一六・二cm×横一二・七cm

御用人支配組世話役杉田恕介の御暇願に関する海舟のメモ書きである。勝は杉田から、病気を理由に御暇して横浜にて帰商したい旨、内々相談されるが、時期を待つよう指示したことが記されている。徳川家の静岡移住にともなう旧幕臣の出処進退が確認できる文書である。

c　児玉益之進ほか消息書付　一枚（口絵写真22参照）
縦一六・二cm×横二一・八cm

児玉益之進ほか軍事掛附の七人が、いまだ駿府に到着していない旨連絡した文書。日記慶応四年六月廿五日条に、乙骨太郎乙より軍事掛附の十五名が駿府行きを願い出た旨の記事があり、児玉以下七人の名前がこの中に入っている。次項dと関連すると思われ、作成時期は、明治元年十月前後か。

d　覚　一枚（口絵写真23参照）
縦一六・四cm×横二六・五cm

「辰十月」は、明治元年十月をさす。もと軍事掛附土屋金六郎ほか三名の宿所を報告した文書。この三名は、日記の慶応四年六月廿五日条にみえる駿府行きを願い出た軍事掛附の十五名のうちに入っている。このうち木村熊二の伝記では、熊二は官軍への抵抗を試みたのち潜伏し、妻鎧子（田口卯吉の姉）と実家田口家の人々は横浜や程ヶ谷に逃れ、明治元年冬、これより前に駿府入りした熊二と合流したという（田口親『田口卯吉』）。これによると、熊二らはしばらく潜伏ののち、十月以前に駿河入りしたことになる。沓ノ谷村は、現在の静岡市沓谷にあたる。なお、端裏に筆跡不明の鉛筆書きがあるが、年代や表記内容に本文書との関連が認められず、書かれた時期も不明。

e　伊庭想輔明細短冊　一枚（口絵写真24参照）
縦一三・八cm×横九・八cm

御広間組差図役下役伊庭想輔（環助、諱真）の明細短冊である。明細短冊とは、短冊状の紙片に、本人の名前、年齢、禄高、職歴、祖父・父の名前、略歴などを記した幕臣の履歴書である。明治二年（「当巳年」）六月の版籍奉還の際、静岡藩に提出されたものと考えられる。伊庭想輔は、伊庭八郎秀穎の実父軍兵

衛秀業の従兄弟違いである。幕末から維新期にかけて、御徒見習勤、御軍艦乗組勤番、神奈川奉行支配定番役出役、二丸火之番、別手組出役、銃隊、銃隊差図役並勤方、御広間組差図役下役と歴任し、のち東京に出て商業を営んだ。子息に音楽評論家伊庭孝がいる。

f　大野藤十郎ほか人物覚書　一枚（口絵写真25参照）

縦二四・一cm×横三・九cm

作事方支配組頭大野藤十郎・秋山杢兵衛（明了）、作事方被官前田啓五郎・今井亀太郎の評判についての海舟自筆のメモ書きと考えられる。大野は、文久二年から慶応四年にかけて同役として、小川町歩兵屯所普請修復や西丸普請御用など、主に普請に関する掛に携わった、まさに「普請極巧者」であった。明治後は静岡に移住し俳人として活躍。秋山は、呉服橋門橋掛直修復御用、小川町歩兵屯所仮稽古場取建など、やはり同時期に普請に関する掛に携わった、「宜敷者」であった。また秋山は、文久二年十月老年までの精勤に対し褒美を下賜されている。

g　土蔵引渡証　一枚（口絵写真26参照）

縦一五・八cm×横九・六cm

赤色の紙片に書かれる。日記の明治元年九月五日条上欄に「本日、吉川殿屋敷土蔵并鍵類、同人用立三河屋兵助江引渡相済」とあり、本文書と内容が一致する。「吉川殿」「吉川屋敷」は、静岡県庵原郡山原村（現清水市）の名主吉川東一郎（宜英）のこと。彼はのちに庵原郡長・静岡県会議員となった。三河屋兵助は、吉川家の用達商人か。同じく日記の同年八月十日条上欄に「洋書五箱駿河江船廻しす、小箱五ツ、吉川当て也」とあり、吉川家の土蔵には江戸から運んだ海舟の荷物が収納されたことがうかがえる。鍵を引き渡した松浦壮助については、日記慶応四年八月晦日丞に「松浦江一生之手当百両遣す」とあり、これが壮助のことと思われる。

h～m　名刺　六枚　（口絵写真27・28参照）

h「米沢藩　宮島誠一郎」　縦九・八cm×横三・二cm

i「延岡藩　原小太郎」縦九・九cm×横四・二cm

j「海軍教師附　小野寺常治」縦八・三cm×横二・九cm

k「高知藩　下村銈太郎」縦一〇・七cm×横三・八cm

l「高知藩　林有造」縦一一・二cm×横三・六cm

m「恭黙書斎」縦九・二cm×横三・七cm

これらの名刺がいつの時点で海舟に渡されたものかは不明。日記にみえる米沢藩の宮島誠一郎と海舟との出会いは、慶応四年六月二日条からである。この時宮島は、奥羽越列藩同盟による建白書を京都の新政府へ提出する途上にあった。以後海舟が没するまで、二人は親友の交わりを持ち続けることとなる。また、下村銈太郎は土佐藩留守居役で、宮島誠一郎らの持参した建白書の提出にさいし仲介の労をとっている。日記の明治二年三月四日条に、海舟が彼と会ったことが記されている。この時海舟は土佐の山内容堂との接触をはかっており、この日は駿府藩が提出した版籍奉還の上表の問題で土佐藩邸を訪れている。林有造の名刺も同じ頃受け取ったものか。

（落合則子・田原昇）

本巻の編集にあたり、左記の方々より多くのご教示をいただくことができた。末筆ながら深く謝意を表する。なお、日記に登場する人物については不明な点がまだ多くあるため、諸方面の方々からのご教示を乞う次第である。

安達裕之（日本海事史学会会長）・池田真由美（市川市立市川歴史博物館）・河村壽仁・牛米努（税務大学校租税史料館）・小堀信幸（船の科学館）・白石烈（中央大学）・友田昌弘（中央大学）・樋口雄彦（国立歴史民俗博物館）・松浦玲（歴史家）・森田朋子（中部大学）・横山伊徳（東京大学史料編纂所）・渡邊嘉之（練馬区郷土資料室）

（五十音順、敬称略）

【訂正】

平成十四年刊行の「海舟日記（一）」解説の中で、第三冊に付属する文書bについて、本文書は幕府海軍の士官に関するものではなく、駿河府中藩「航運方」の俸金表である旨、樋口雄彦氏からご指摘をいただきました。『静岡県史』資料編十六所収の「静岡御役人附」（明治三年三月刊）の中に全員の氏名が載っています。また、本文・注にも左記のような誤りがありました。ここに訂正し、おわびいたします。

海舟日記（一）

二七四頁五行目（誤）「肥前候」→（正）「以酊庵」

二七六頁上欄（誤）「十時□□□」→（正）「十時無事老」（柳川藩の兵術家）

海舟日記（二）

八七頁一三行目・一四〇頁二行目

（誤）「花源次郎」→（正）「団源次郎」（開成所教授手伝並出役）

〈参考文献〉

【史料・文献】

勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集』一八・一九（勁草書房　一九七二・七三）
勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集』一・二・一〇・二二・別巻（講談社　一九七四・七　六・八　二・八三・九四）
『続徳川実紀』五（吉川弘文館　一九六七）
『復古記』二・三・四・九（東京大学出版会　一九七四・七五覆刻）
『続通信全覧』類輯之部三四　暴行門（雄松堂出版　一九八七）
『岩倉具視関係文書』四（日本史籍協会叢書　東京大学出版会　一九六八覆刻）
『百官履歴』一・二（日本史籍協会叢書　東京大学出版会　一九七三覆刻）
朝倉治彦編『明治初期官員録・職員録集成』一（柏書房　一九八一）
金井之恭他著・三上昭美校訂『校訂明治史料顕要職務補任録』（柏書房　一九八一）
『横浜市史』二（横浜市史編集室　一九五九）
『柏市史』資料編一（柏市役所　一九六九）
『静岡県史』資料編一六・近現代一（静岡県　一九八九）
『静岡県庵原郡誌』（千秋社　一九九六復刻）
『改訂肥後藩国事史料』八・九（国書刊行会　一九七三）
『鹿児島県史料　忠義公史料六』（鹿児島県　一九七九）
慶應義塾図書館編『木村摂津守喜毅日記』（塙書房　一九七七）
宮島誠一郎『戊辰日記』（米沢市　一九九八）
文倉平次郎『幕末軍艦咸臨丸』（名著刊行会　一九六九復刊）
山崎有信『彰義隊戦史』（隆文館　一九一〇）
本多晋「彰義隊発起顛末」（『旧幕府』一－二　マツノ書店　二〇〇三復刻）
山田昌邦「三嘉保丸の難破談　函館始末②」（『旧幕府』一－四　同右）
「故浅野美作守履歴」（『旧幕府』四－七　同右）
「戸川伊豆守小伝」（『旧幕府』五－一　同右）
立脇和夫監修『ジャパン・ディレクトリー　幕末明治在日外国人・機関名鑑』第一巻（ゆまに書房　一九九六）
アーネスト＝サトウ著・坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』下（岩波文庫　一九六一）
高梨光司『維新史籍解題　伝記篇』（マツノ書店　二〇〇三復刻）
山田万作編『岳陽名士伝』（長倉書店　一九八五復刻）
『越佐維新志士事略』（国幣中社弥彦神社越佐徴古館　一九二二）
関口隆正『関口隆吉伝』（何陋軒書店　一九三八）
平尾道雄『坂本龍馬　海援隊始末記』（中公文庫　一九七六）
赤松範一編注『赤松則良半生談』（東洋文庫　平凡社　一九七七）

松岡英夫『大久保一翁』（中公新書　一九七九）
須見裕『徳川昭武』（中公新書　一九八四）
田畑忍『加藤弘之』（人物叢書　吉川弘文館　一九八六）
山口修『前島密』（人物叢書　吉川弘文館　一九九〇）
大久保利謙編『津田真道　研究と伝記』（みすず書房　一九九七）
新人物往来社編『伊庭八郎のすべて』（新人物往来社　一九九八）
萩原延寿『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄―』5・6・7（朝日新聞社　一九九九・二〇〇〇）
松浦玲「勝海舟の生涯とその後　遙かな海へ」二二～三〇（『論座』三五～四三　一九九八・九九）
『静岡県歴史人物事典』（静岡新聞社　一九九一）
「駿河表召連候家来姓名」（国立公文書館所蔵）
原口清『明治前期地方政治史研究』（塙書房　一九七二）
松尾正人『維新政権』（吉川弘文館　一九九五）
高橋実『幕末維新期の政治社会構造』（岩田書院　一九九五）
飯島千秋『江戸幕府財政の研究』（吉川弘文館　二〇〇四）
倉沢剛『幕末教育史の研究』二（吉川弘文館　一九八四）
川崎晴朗『幕末の駐日外交官・領事館』（雄松堂　一九八八）
藤井哲博『長崎海軍伝習所』（中公文庫　一九九一）
宮地正人『歴史のなかの新選組』岩波書店　二〇〇四）
山形紘『市川・船橋戦争』（崙書房　一九八三）
加来耕三『真説上野彰義隊』（中公文庫　一九九八）
菊地明・伊東成郎編『戊辰戦争全史』（新人物往来社　一九九八）
田村貞雄編著『徳川慶喜と幕臣たち』（静岡新聞社　一九九八）
前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』一～四（私家版　一九九三・九七・二〇〇〇）
前田匡一郎『慶喜邸を訪ねた人々―「徳川慶喜家扶日記」より―』（羽衣出版　二〇〇三）
白石良夫『最後の江戸留守居役』（ちくま新書　一九九六）
小沢武志編『幕末　写真の時代』（ちくま学芸文庫　一九九六）
松尾正人「慶応四年の鎮将府巡察使について」（村上直編『論集関東近世史の研究』名著出版　一九八四）
辻達也「明治維新後の徳川宗家―徳川家達の境遇―」（『専修人文論集』六〇　一九九七）
宮地正人「混沌の中の開成所」（東京大学編『学問のアルケオロジー』東京大学出版会　一九九七）
高原泉「開成所版『万国公法』の刊行―万屋兵四郎と勝海舟をめぐって―」（『中央大学大学院研究年報』二九　二〇〇〇）
矢口祥有里「滝村小太郎と岡田斧吉」（伊庭八郎研究会『残照』四号　二〇〇三）
内海孝「ウォルシュ＝ホール商会」（『横浜開港資料館館報開港のひろば』一六　一九八六）

西川武臣「ウォルシュ・ホール商会の番頭松屋伊助と文書」（『横浜開港資料館館報開港のひろば』二一　一九八七）
吉良芳恵「薩摩藩探索方南部弥八郎の謎」（『横浜開港資料館報』二六　一九八八）
原口清「府中（静岡）藩の駿河接収と無禄移住者の海上輸送」（『静岡県史研究』三　一九八七）
樋口雄彦「沼津兵学校関係人物履歴集成」（『沼津市博物館紀要』二二　一九九八）
樋口雄彦「林洞海筆『茶農漫録』の総目次と紹介」（『沼津市博物館紀要』二八　二〇〇四）
「沼津藩出身人物小伝」（『沼津市明治史料館通信』四　一九八六）
「幕末維新の遣外施設・留学生と沼津兵学校の人脈」（『沼津市明治史料館通信』五　一九八六）
「天朝御雇」（『沼津市明治史料館通信』一六、一九八九）
「海軍・海事関係の人々」（『沼津市明治史料館通信』一九　一九八九）
「姻戚関係にみる沼津兵学校の人物」（『沼津市明治史料館通信』二三　一九九〇）
「英学者薗鑑」（『沼津市明治史料館通信』四七　一九九六）
「姻戚関係にみる沼津兵学校の人物その二」（『沼津市明治史料館通信』五五　一九九八）

【展覧会図録】
『沼津兵学校』（沼津市明治史料館　一九八六）
『近世・近代ぬまづの俳人たち』（沼津市明治史料館　一九九六）
『神に仕えたサムライたち－静岡移住旧幕臣とキリスト教－』（沼津市明治史料館　一九九七）
『幕末・維新の相模原～村の殿様・旗本藤澤次謙と村人たち～』（相模原市立博物館　二〇〇〇）
『幕末の市川』（市立市川歴史博物館　二〇〇三）
『大関増裕』（栃木県立博物館　二〇〇四）
『幕末の動乱と紀州』（和歌山市立博物館　一九八七）
『没後一〇〇年勝海舟展』（東京都江戸東京博物館　一九九九）

※これらの文献は人名注記のために活用したもので、海舟の関係文献ではない。なお、基本的な事典類は省略した。